

日本舞踊の動作と身体言語 —「命の場」での「体話」の一助として—

日本舞踊家 長崎由利子

1. 目的・動機

本研究では、日本舞踊の動作を、病床での身体言語として役立てることを検討していく。

私は、二年程前、余命一ヶ月の末期ガンで療養している親戚のF（当時60歳・男性・聴力はあるが言語会話困難、スポーツと音楽が趣味）の、見舞いをするようになった。

その際、私は、Fが言語会話困難なことを踏まえたうえで、彼の聴力は尊重して、話しかける時は、言語と同時に身体言語も併用した方が、会話が円滑になると判断して、日本舞踊の動作を身体言語として使用することを思いついたのである。

2. 方法

Fが全く日本舞踊に造詣がないことを念頭に置き、誰が見てもすぐに何を表現しているかわかる動作をいくつか選び、次の三種の場面を想定し、日本舞踊の動作を基本として、ベットサイドでFに話しかける時の動作を試作してみた。

(1) 日常生活の意思伝達の場面

「お茶を飲みますか？」

日本舞踊によく出てくるお茶をたてる動作を基本として、自分の左手を茶碗に見立て右手で縁を二回なでて、「お茶を飲みますか？」と、話しかけながら相手の口元にもっていく。

(2) 戸外の状況説明の場面

「桜が散っていますよ」

「外は」と言いながら、日本舞踊の型で窓のある方向を指し、常磐津「年増」の「あれ散るわいな」の部分等のような桜の花びらを吹く動作を基本にして、「桜が散っていますよ」と、声をかけながら右手で花びらを吹く動作をする。この場合、事前に花びらを拾っておき、本物を吹いた。

(3) 趣味の話の場面

「キャッチボールしませんか？」

長唄「京鹿子娘道成寺」や「手習子」等でなじみのまりつきの動作を基本としてボールのイメージを与えながら、今度は日本舞踊にはないボールを投げる動作を作り、「キャッチボールしませんか？」と話しかけてみる。

3. 結果

Fへの見舞いは、都合数回ほどで、一回目の見舞い以来、何回か、(1)を使用して、言語と身体言語の両方から話しかけてみたところ、お茶を飲みたい時には、私の左手の「茶碗の端」と思われるところを軽くたたき、飲まない時は、左右に

軽く手を振ってくれて、ひじょうに円滑にその意志を聞くことができた。

(2)では、本物の花びらを吹いてあげたことに、笑顔で答えてくれ、私が吹いた花びらに自らも触れてみて、戸外の状況を満喫したようだ。

(3)は、スポーツを趣味とするFに、実際にボールを投げる動作をしたところ、彼の目が輝き、片手の指先を丸めて、ボールをキャッチする動作をしてくれた。まさに、最期のキャッチボールである。私が投げて彼が受け取るのを三回繰り返した後、彼は、涙を流した。たとえ、疑似空間であってもスポーツを楽しませることができたのである。私も、この光景を、忘れることができない。

以上のように、日本舞踊の動作を基本としたFへの身体言語は、ほぼ成功と考えられる。

そこで、このコミュニケーションを、残り少ない人生を燃焼させている「命の場」での、体でする話、「体話（たいわ）」と、名付けたい。

4. 考察

Fへの数回の見舞いからだけでは早計かもしれないが、この「命の場」での「体話」が、一応成功した要因を検証しておきたい。

第一に、「お茶を飲みますか？」等と声をかけながら（言語）、同時に「お茶」の「体話」（身体言語）もして、聴覚と視覚の両方から話しかけたことで、病気で衰えた理解力を補助し、明確な意志表示を楽にしたと考えられる。

第二に身体言語でしか意志表示ができない相手に合わせて、「体話」という、共通の方法でも話しかけてくれる事の安心と同胞感による心地良さもあるだろう。

第三に、日本舞踊は、芸術であるから、意志伝達だけが目的の手話や日常生活での身振りとは違い、全体的に優雅で、各動作にはしっかり首を曲げる、肩を落とすとといった「余裕」や「遊び心」があり、「お茶」・「桜の風景」やキャッチボール等の疑似空間も提供してくれる。

この、「余裕」や「遊び心」、疑似空間の提供こそ、病床で失意にある人に生き甲斐を与え心を癒してくれるのである。

したがって、日本舞踊の動作は、「命の場」での「体話」（身体言語）として、言語会話困難な末期疾患や難病の人との意志疎通の一助となり、かつ、たとえ疑似空間であっても、生き甲斐を与え、癒し効果をも期待できると思う。

さらに、癒し効果は、すでに広く普及している芸術療法のひとつであるダンスセラピーと並んで、日本舞踊セラピーの可能性を示唆しているのではないだろうか。